

勝本浦散策

本物の漁師まち
「浦」の路地を巡る



1 神功皇后の馬蹄石

神功皇后が三韓出兵の折、この地で三韓の方を見つめ気合を入れたとき、乗っていた馬にもその気持ちが伝わり、馬蹄(ひづめ)をのせていた石に穴があいたと言われ伝えられています。

2 聖母宮

島内有数の古社で、神功皇后の三韓出兵が創建の起源ともいわれています。本殿は18世紀中頃に再建されたもの。西門(表門)はさらに古く、豊臣秀吉の朝鮮出兵の折に加藤清正が周囲の石塀とともに造営して寄進したものです。

3 朝鮮通信使迎接受跡(阿弥陀堂)

江戸時代、朝鮮通信使は勝本浦に往路11回、帰路8回寄港し、平戸藩の接待を受けました。当時の宿舎は約2,500坪あったそうですが、現在では基礎石と伝えられる石3個だけがこの地に残っています。

4 藤嶋家住宅

明治時代以前に建てられた木造2階建ての住宅。「ばんこ」や「持ち送り」など、勝本浦独特の古い建築様式が残る建造物です。昭和の中頃までは「大久保本店」という海産物問屋だったそうで、現在ではその店名を復活させ、おしゃれなカフェとして営業されています。

5 対馬屋敷跡の石塀

江戸時代、対馬藩が本土との中継基地として屋敷を構えていました。当時の屋敷の面積は335坪で、60人以上の対馬の人々が常駐していたといわれています。現在では、鯨組「永取家」との境界に建てられた石塀だけが残っています。

6 永取家鯨供養塔

勝本浦の鯨組「永取家」が建てた供養塔。「永取氏」は元は「原田氏」であったが、「鯨が永く取れるように」という願いを込めて、1864(元治元)年に平戸藩主から「永取」の姓を賜ったそうです。

7 旧つたや旅館

現在では建てるのが難しい、木造3階建ての歴史的建造物。勝本浦から客船が発着していた昭和30年代をピークに、平成5年頃までは旅館として営業されていましたが、現在は建物だけが当時のまま保存されています。

8 杉玉のある酒屋

杉玉は、造り酒屋の軒先に吊るすことで新酒ができたことを知らせる役割を果たします。現在、ここで醸造は行われていませんが、杉玉とともに建物のつくりが明治・大正の頃の造り酒屋の風情を残し出しています。

9 勝本朝市

江戸時代に漁民、農民がそれぞれの産物を持ち寄り交換したのが始まりといわれています。現在でも毎朝とりたての海の幸、山の幸が所狭しと並べられ、地元の人はずもとより、観光客とも言葉を交わし合い商う風情が見られます。

10 旧松本薬局

1912(明治45)年に建てられた店舗兼住宅。1階は格子窓の付いた和風のデザイン、2階はモルタル壁と銅板張りの開き戸が洋風の印象を与える建築物。平成21年に登録有形文化財(建造物)に指定されました。

11 土肥家新宅跡

江戸時代には「鴻池」、「三井」とともに日本の三大富豪といわれた鯨組「土肥家」。現在、2軒の酒屋さんが並んで建っていますが、これらの建物は今から約200年前に土肥家の新宅として建てられたもの。屋根には造り酒屋だった頃に使われていたレンガ造りの煙突がそびえ立っています。

12 印鑰神社

871(貞観13)年、外敵の警戒を厳重にするため大宰府から大量の武器が送られ、勝本浦に兵庫がつくられたといわれています。「印」は官印、「鑰」は官庁の倉庫の鍵のこと。この神社は重要な印や鍵を保管する場所であったと考えられています。

13 長四郎さんの墓

天保年間(約160年前)のこと、7歳のいたいけな童子が、平戸藩城代家老の行列を横切り手打ちにされてしまいました。人々は哀れに思い、供養塔をつくってその霊を慰めてきました。いまでも毎日のように近所の方たちが供養されています。

14 阿房塀と御茶屋屋敷跡

1767(明和4)年、鯨組「土肥家」の四代目当主が財を投じて豪華な屋敷を築かせた。屋敷入口には大門、中門を設け、左右には番所もあり、屋敷内の彫刻には金銀を散りばめていたといわれています。南側に残る高さ約7m、長さ約90mの石塀が往時をしのばせます。

15 御仮殿

毎年秋の聖母宮大祭(10月10日～14日)、対岸の聖母宮から2隻の船で渡ってきた御神輿がここに祀られ、神楽などの神事が盛大に行われます。祭り本番、御幸舟2隻の競争による勝敗で、先頭の御神輿が決まり町内を巡りながら聖母宮へ戻ります。

16 田ノ浦納屋場跡

江戸時代、捕獲された鯨の解体がここで行われていました。現在では、埋め立てが進み当時の面影はありませんが、昔の絵図「豊後名勝図誌」を見ると、今も残る石垣が当時の納屋場の石積み岸壁であることがわかります。

